

平成30年度 奈良市立朱雀こども園 研究実践概要

園長名 鈴木 優子
全園児数 215名

1. 研究主題 豊かな心を育み、いきいきと生活する子どもをめざして
—身近な環境や人とのかかわりをとおして—

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

4月より、朱雀保育園、朱雀幼稚園が一つになり分園型のこども園となった。経験も様々、一日の流れも違う子ども達が、こども園でも自己発揮できるように身近な環境や人とのかかわりを通して好奇心や探求心をもって遊び、いきいきと生活する子どもをめざし、この主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが身近な環境に興味や関心をもち、友達や保育者と一緒に夢中になって遊び込もうとする力を育てる。

②研究の重点

- ・子どもの発達に配慮し、同年齢や異年齢児と触れ合う中で、思いやりや憧れなど豊かな心が育まれるようにかかわっていく。
- ・「またやりたい」「もっとしたい」という意欲を育てていくために、いろいろな経験を繰り返し積み重ねていくための援助や環境構成を工夫する。

③活動の方法 _____人とのかかわり、_____環境構成

【0歳児】「つめたいね」～ 8月～

(ねらい) ○保育者と一緒に氷に触れて遊ぶ。

○保育者との信頼関係の中で自分の気持ちを安心して表す。

夏、タライの中に氷を入れて感触遊びを楽しんだ。

保育者がタライに氷を入れると、すぐに触りに来て握ったり、タライの中でかき混ぜたりする子、「アー！アー！！」と指差して知らせる子、他の子が遊ぶ様子をじっと見ている子など、様々な姿がみられた。初めて見る氷に体を硬くしている子もいたが、保育者が手のひらにのせて、「見て～！溶けてきたよー！」など声をかけ、氷の様子を見せることで徐々に近付き、最後は一本指でチョンと触ることが出来た。

<反省・評価>

初めての経験であったが、安心できる環境・保育者とのかかわりがあったからこそ抵抗なく氷の冷たさや硬さなどを、目で見たり手で触ったりしながら感触遊びを楽しむことが出来た。



【1歳児】 「目、見つけた！」～ 10月～

(ねらい) ○保育者やクラスの子と一緒秋の自然に触れて遊ぶ。

○思ったことや発見したことを保育者に身振りや言葉で伝えようとする。

虫探しをしていると、保育者がバッタを見つける。手のひらに乗せて



が近づいてきて「あ！」「バッタ！」と声をあげたり、じっと覗き込んだりする。バッタが跳んでB児の服についたのを見て、A児は触れてみたくなったようで「かして」と言う。「優しくね」とそっと差し出すと、A児は静かな手つきでそっとバッタを手を取った。A児が「足、足にのせて」と言う。靴に乗せると、バッタはA児の足をよじ登り、ひざの所で止まった。A児もしゃがみ込み、息をひそめてバッタを見つめる。すると、はっとしたように「目、あった！」とつぶやく。「ほんとだ！目があったね！」A児の発見に共感する。その後も大切そうにバッタを手を持ったり、眺めたりしていた。

<反省・評価>

触ってみたいという本児の興味を大切に、触りやすいようにサポートしたり、側で見守ったりした。この日、初めてバッタに触れたA児は、じっくり見て、目があることに気付くという発見につながった。

【2歳児】 「凧、高く上がったよ」～ 1月 ～

(ねらい) ○ 戸外で体を積極的に動かして遊ぶ。

○ 保育者や友達とかかわりながらお正月遊びを楽しむ。

好きな色のマジックで「これおぼけ」「これ自動車」「いちご」などつぶやきながら和紙いっばいに絵をかき、凧をつくった。その後、園庭に出て凧を揚げてみる。一度凧揚げをしたA児が、友達が揚げている様子を見て、「先生、できへん・・・」と高く揚がらないことをしょんぼりしながら伝えに来る。保育者は一緒に紐の長さを調整し、「大丈夫よ、手を万歳して高く上げてごらん」とやってみせる。不安そうな表情だったが、ふわあっと高く揚がり笑顔になる。「Aちゃん、すごいすごい」と声をかけると「できた、できた」「みてみて！」と嬉しそうに何度も振り向きながら園庭を走り回っていた。その後、自信が持てたようで、友達と並んで駆け回る姿も見られた。



<反省・評価>

幼児クラスの遊ぶ姿を見て憧れや、やってみたいという意欲や遊びにつながることも多かったが、分園になり、初めは少し戸惑う姿もあった。春・夏・秋といろいろな活動をする中で自分の庭のように感じ、好きな遊びを自分のペースで存分にできるようになり、今では伸び伸びと駆け回るようになった。これからも一人一人がじっくり遊べる心地よい空間作りに取り組んでいきたい。

【2歳児】 「氷ができたよ」～ 2月 ～

(ねらい) ○ 冬の自然に親しんで遊ぶ。

○ 保育者や友達と一緒にみたくてやつもり遊びを楽しむ。

寒い朝、「うわー、氷やあ」と金魚池横の樽に氷が張っているのを発見。自然の物は初めてでみんな感激する。夏に感触遊びとしてプールや保育室で何度も氷で遊んで親しみを持っていたので、氷を触ったり、割ったり、砂をかけてみたりとままごと遊びが始まる。横長に置かれた机では、カウンターに見立ててお店屋さんごっこも始まった。「氷屋さんですよ～」の賑やかな声に引かれ、横の砂場で遊んでいた1歳児も立ち上がり一緒に氷を触り始めた。



<反省・評価>

分園で広い園庭を乳児のみで自由に使えるようになり、運動遊びや自由探索活動への意欲が増した。砂場を半分にしてテーブルセットをそのスペースに移動することで遊び中の子ども同士の距離が近くなり乳児本来の平行遊びにつながった。子どもの姿を見守り、どのような力をつけたいか考えながら環境構成し、遊びを展開していきたい。

【3歳児】 「ぴょんってとんだ」～ 11月 ～

(ねらい) ○ ドングリを転がす楽しさに気付く。

○ 自分の気付いたことや思ったことを保育者や友達に喜んで話す。

ドングリを手にとって高い場所から「ポトン」と落として遊んでいた姿



て遊ぶことを提案した。4・5歳児が夏にトイで遊んでいた姿を見て、使い方は分かっていたので、スムーズにドングリ転がしが始まる。

ジョイントのついたトイだったので、転がすとドングリが跳ねた。その様子を見て、「あっ、ぴょんととんだ」「先生みてて」と自分の気付いたことを近くにいた保育者に嬉しそうに話し、その発見を再現しようと繰り返し転がすことを楽しんでた。

それを見ていた子ども達が、ドングリを探して転がし始め、その場を共有し遊ぶことを楽しみ始めた。トイを繋げようとする友達の様子を見た子どもが「それしたら出ない」と自分の思いを投げかけた。保育者はそれぞれの気持ちを受け止めトイを繋げて遊びたい子どもには別の場所のできるようにした。

遊びの振り返りの中で、ドングリがぴょんと跳んだ発見(トイの角度を変えると跳び出す方向が変わることなど)をみんなと共有したことで他の子どもも「やりたい」と口々に話していた。その日の夕方、早速他の子どもがドングリ転がしをしている様子が見られ、ジョイントのついたトイを使ってドングリが跳ねる様子を見たり、築山で「せーの」と友達と声をかけて一緒に転がすことを楽しんだりする姿が見られた。

<反省・評価>

・ドングリ遊びが発展するようなきっかけ作りをしたことで自らおもしろいことを発見し、遊ぶようになった。遊びの中でそれぞれの遊びの目的が違うときがあったが、相手に上手く伝わらないときは、保育者が言葉を添えて互いに納得できるような援助や環境構成が必要で、そうすることでそれぞれの遊びが継続し安心して遊ぶことができると感じた。

・遊びの振り返りをしたことで、一つの遊びの楽しさを共通理解し、「自分もやってみたい」と遊ぶ意欲につながり、またドングリ転がしで遊ぶ楽しさを味わうことができた。

【4歳児】 「一緒に行こう！」 (1・2歳児との交流)

(ねらい) ○ 異年齢児と一緒に関わる中で、自分との違いに気付いたり思いやりの気持ちを持ったりする。

○ 秋の自然物に興味を持ち、落ち葉や木の実などの自然物を見つけたり触れたりする。

4月 それぞれの園舎で過ごす。

9月 運動会の踊りやバルーンを乳児棟へ見せに行く。

10月 乳児が幼児棟に来て、焼きいもパーティに参加する。
乳児が園庭に遊びに来る。

11月 散歩

2歳児と一緒に手をつなぎ散歩に出かける機会を作った。歩きながら「あっ！ここに葉っぱあるよ」「ここ石あるから気をつけてね」と声をかける子や黙ったまま歩く子などさまざまだった。ドングリやメタセコイヤを拾っている時も、「ここにドングリあるで。いれようか？」と声をかけお散歩バッグに入れてあげたり、「ここに実あるから取りや」と教えてあげたりする姿があった。振り返りでは、「小っちゃいと思ってたのに いっぱいしゃべってくれた。」や「小さい小さいドングリを見つけてはった。」など想像していた2歳児の姿との違いや新たな発見を嬉しそうに話していた。



1月 お店屋さんごっこ

1歳児・2歳児が買い物に来る。「いらっしゃいませ。」と声を掛けたり、「これは、コマでここを持ってクルッと回すおもちゃです。」と商品の説明をしたりする。また、一緒に手を繋ぎ「ここは、ドーナツ売ってるで。」「レストランで何か食べる？」とお店を回ってあげる姿もあった。



<反省・評価>

- ・なかなか一緒に遊ぶ機会が作れなかったが、子ども同士通じ合えるものがあり2歳児は抵抗なく手を繋ぎ一緒に歩いたり探索したりすることが出来た。
- ・「2歳児は小さい」というイメージが大きかったようだが実際に関わる中で気付くことがたくさんあり、驚いたり嬉しそうに話したりする姿を見て交流の大切さを改めて感じた。来年度3歳児・5歳児となり同じ園舎で過ごすので、これからの交流につなげていきたい。

【5歳児】 「新しいこども園」 ～4月～

(ねらい) ○ 5歳児になった喜びや自覚をもち友達や保育者と一緒に園生活を楽しむ。

今年度から幼稚園、保育園が一緒になりこども園になった。こども園になるにあたって数年前から計画的に交流をし、昨年度は幼稚園舎での合同の保育も行ってきた。少人数の中で活動してきた元幼稚園児と長い年月共に育ってきた保育園児が、開園当時はそれぞれで遊ぶ姿があった。

日々の生活や遊びを一緒にしていく中で、自然と、幼保が混じり合い かかわる姿が増えてきた。また、夏祭りのみこし作り、運動会、生活発表会、作品展などを通して、少人数グループでの話し合いに始まり、クラスごと、そして学年と、段階を経て、相談したり、力を合わせたりしながら進めてきたことで、一人一人の子どもたちが、積極的に思いを出し合い、一つのものを作り上げる楽しさを感じながら取り組む姿が見られた。



<反省・評価>

- ・どんな場面でも、常に子ども達同士で話し合う機会を設けてきたことで、自信を持ち自分の思いを話せるようになってきた。意見がぶつかり合うこともあるが、保育者や友達の力を借り、折り合いをつけながら園生活を楽しんでいた。
- ・好きな遊びを通して自然に関わりが広がるように環境を整えていくことで、友達同士が刺激を受け合って活動し認め合う姿につながった。

5. 研究の成果

- 乳児では、保育者との信頼関係のもと、さまざまな自然に触れたり、感覚遊びをしたりする中で「もっとさわってみたい」「なんだろう」と意欲や物への興味が生まれるなど、五感を豊かに働かせる姿がみられた。
- 幼児では乳児の土台に、豊かな自然を友達や保育者と共有することで自然や事象に深くかかわり、「きれいだな」「どきどきする」などの豊かな感性や「ふしぎだな」「なぜだろう、やってみよう」といった意欲や態度が育まれた。また保育者が、一人一人の思いや心に寄り添った援助をしたことで、生き生きと活動し思いや考えをいろいろな方法で表現しようとする姿につながった。
- 分園になり、乳児、幼児のそれぞれの環境構成が整えられ、遊びも保証された。

6. 今後の課題

- 分園になり意図的な交流は心がけてきたが、自然な交流や遊びの刺激は少なくなり、0歳から就学までのつながった教育・保育をどのようにしていくかが課題である。
- 豊かな自然環境に、意図的にかかわることができるように計画し、より知識や感性を育む実践を積み重ねていくことが必要である。
- 子どもが夢中になって遊びこむためには、何に興味をもち、どのように考えているかなど子どもの姿を常に見取りながら、保育者自身の感性を磨き、人的、物的環境を整え、援助の在り方を追求していきたい。